

今回は「夏の野鳥」について紹介しますが、最初に野鳥の渡りについて簡単に紹介し、次に野鳥にとって最大の活動期となる春～夏の繁殖期の様子（さえずり・夏羽・求愛ダンス・求愛給餌・巣作り・抱卵・巣立ち）を紹介。そして、この繁殖時期に心すべき観察マナーについて紹介します。

1 留鳥・夏鳥・冬鳥・渡り鳥について

日本で見られる野鳥は約 600 種余りと紹介しましたが、全ての種が 1 年中日本で生息しているわけではありません。種によって日本に生息している時期が違います。日本に生息する時期の違いで、「留鳥」・「夏鳥」・「冬鳥」・「渡り鳥」と区分けしています。

スズメやウグイスのように春夏秋冬 1 年中日本に生息している鳥を留鳥と言います。ツバメやオオルリのように春に南方から日本に渡ってきて繁殖し、秋に南方へ渡る鳥を夏鳥と言います。反対に、ツグミやジョウビタキのように秋に北方から日本に渡ってきて冬を過ごし、春先に北方に帰る鳥を冬鳥と言います。そしてシギやチドリのように春に東南アジアなどの南方からシベリアなどの北方へ渡る途中で日本を通過する鳥を渡り鳥と言います。この渡り鳥は秋に北方から南方へ渡るときも日本を通過します。

鳥は留鳥もいるのに、なぜ渡りをする必要があるのかと思われるでしょう。寒くて餌の少なくなる冬に、暖かくて花の蜜や虫などの餌のある南方へ行くのはわかりますが、それならば 1 年中暖かい南方で住んでおればよく、わざわざ危険な渡りをしてまで夏に北の方へ行かなくてもと思います。

渡りの理由は繁殖のためと言われています。

地球上で四季がある地域では、春になると植物が一斉に芽を出し花が咲きます。それに伴い、やわらかい葉や花の蜜を食する虫や昆虫も一斉に孵ります。この一時期に爆発的に繁殖する虫や昆虫が雛の貴重な食料になるので、やわらかくて栄養たっぷりの虫や昆虫が豊富な春から初夏にかけて、多くの野鳥がそれぞれの棲み分け地に行って繁殖をします。（南方の繁殖時期は勉強不足でわかりません。）

かくして、国境のない野鳥は地球規模で移動する棲み分けの知恵を遺伝子に刻み込み、毎年、律儀に「渡り」を繰り返します。



ウグイス (留鳥)



オオルリ♂ (夏鳥)



ジョウビタキ♂ (冬鳥)



ハマシギの群れ (渡り鳥)

2 宇部市の霜降山（標高 250m）で繁殖する留鳥と夏鳥

日本で繁殖する野鳥は、スズメなどの留鳥とツバメなど日本に渡って来る夏鳥がいます。ツグミなどの冬鳥やシギ・チドリなどの渡り鳥は日本では基本的に繁殖を行いません。繁殖場所は、シベリアなど日本より北方の地域です。

それではこの近隣ではどんな種が繁殖しているか、宇部市の霜降山での生息調査から紹介します。

表 1 は 1998 年から 2007 年の 10 年間毎月 2 回生息調査を行った時に観察された野鳥です。88 種確認していますが、他の調査時（タカの渡り調査等）に確認された種を合わせると、霜降山で観察される野鳥は約 100 種になります。88 種の内、約 4 割が留鳥で、夏鳥と冬鳥がそれぞれ 3 割ですが渡り鳥は観察されていません。シギ・チドリなど渡り鳥は海岸を通るので、海岸線から約 10km 入った丘陵にある霜降山は渡り鳥のコースになっていないようです。

留鳥と夏鳥は日本で繁殖すると思いましたが、留鳥でも水辺で繁殖するカイツブリなどは霜降山で繁殖は確認されていません。また、夏鳥でもハチクマなどは日本の信州・北海道方面まで北上して繁殖するので霜降山では繁殖記録はありません。

（表 1 に霜降山で繁殖が確認された種と可能性がある種を○印で標記）

留鳥と夏鳥の内、霜降山で繁殖している野鳥は約 40 種です。宇部市や山陽小野田市の他の調査地と比べても多く、霜降山の自然がより豊か（自然林と年中枯れない沢がある）であることが伺えます。

ところで、留鳥は 1 年中日本にいますが、夏鳥はいつごろ日本に渡って来るのでしょうか。

ツバメは 3 月中旬にはそのスマートな姿を見せてくれますが、多くの種が 4 月～5 月ごろに日本に渡ってきます。種によって早い遅いがあるようです。

図 1 に霜降山で観察した主な夏鳥の初認の日（その年に初めて確認された日）と終認（その年に最後に確認された日）の一覧を示します。これを見ると面白いことに気づきます。種によって霜降山に来る時期が少しずつずれています。なかでもホトトギスは夏鳥の中では遅く来ています。托卵する習性があるので、托卵する種（ウグイスなど）の巣ができた頃にやってくればよいようです。種によって来る時期が微妙にずれているのは、子育てに必要な餌の需要が一時期に重ならないようにしているの

留鳥			夏鳥			冬鳥			渡り鳥		
No.	鳥名	繁殖	No.	鳥名	繁殖	No.	鳥名	繁殖	No.	鳥名	繁殖
1	カワウ	○	1	チュウサギ	○	1	コガモ	×	1		
2	ダイサギ	○	2	ホトトギス	○	2	ノスリ	×			
3	コサギ	○	3	ツバメ	○	3	アオバト	×			
4	アオサギ	○	4	ヤブサメ	○	4	ハクセキレイ	×			
5	ミサコ	○	5	キビタキ	○	5	ヒレンジャク	×			
6	トビ	○	6	オオルリ	○	6	ミソサザイ	×			
7	オオタカ	—	7	サメビタキ	○	7	ルリビタキ	×			
8	ハイタカ	○	8	サンコウチョウ	○	8	シヨウビタキ	×			
9	コジュケイ	○	9	ハチクマ	×	9	トラツグミ	×			
10	ヤマトリ	○	10	ツツドリ	×	10	クロツグミ	×			
11	キジ	○	11	アマツバメ	×	11	アカハラ	×			
12	キジハト	○	12	ヤイロチョウ	×	12	シロハラ	×			
13	ヤマセミ	—	13	コシアカツバメ	×	13	マミチャシナイ	×			
14	カワセミ	○	14	サンショウクイ	×	14	ツグミ	×			
15	アオケラ	○	15	カヤクグリ	×	15	キウイタダキ	×			
16	コケラ	○	16	コマドリ	×	16	カシラダカ	×			
17	キセキレイ	○	17	ノコマ	×	17	ミヤマホオジロ	×			
18	セウロセキレイ	○	18	ノビタキ	×	18	アオジ	×			
19	ヒトリ	○	19	シマセンキュウ	×	19	クロジ	×			
20	モス	○	20	マキノセンキュウ	×	20	アトリ	×			
21	ウグイス	○	21	オオヨシキリ	×	21	マヒワ	×			
22	エナカ	○	22	メホソムシクイ	×	22	ヘビマシコ	×			
23	ヤマカラ	○	23	コホソムシクイ	×	23	ウソ	×			
24	シジュウカラ	○	24	エゾムシクイ	×	24	イカル	×			
25	メジロ	○	25	センダイムシクイ	×	25	カケス	×			
26	ホオジロ	○	26	エゾビタキ	×						
27	カララヒワ	○	27	コサメビタキ	×						
28	スズメ	○	28	コホオアカ	×						
29	ハシホソガラス	○									
30	ハシブトガラス	○									
31	カイツブリ	×									
32	コイサギ	×									
33	カルガモ	×									
34	ウミアイサ	×									
35	ビンスイ	×									
合計	35		28			25			0		

タマシギは抱卵・子育てはオスが行い、メスは次のオスを求めて徘徊します。羨ましがってはいけません、これも少ないメスで子孫を多く残すための知恵です。

4 求愛ダンスと求愛給餌

野鳥のオスはメスに気に入ってもらうためにきれいな羽で装ったり、きれいな声で囀ったりしますが、その他にも求愛ダンスや求愛給餌を行う種もあります。

10 数年前、テレビの CM シーンで南洋の鳥「フウチョウ」のオスが、カラフルな羽を広げてメスを呼ぶ求愛ダンスを見られたことがあるかと思います。その優雅で緩急のある舞に私が見てもウットリします。しかし、そのシーンはつれなくメスが飛び去ってしまいました。一緒に見ていた息子が「努力が足りん！」と一声感想を漏らしていました。(その息子もいまだに努力が足りんようです。)

モズの求愛ダンスを見たことがあります。モズは目に黒メガネをかけたように黒い過眼線があり、どすの利いた顔つきをしています。これがオスのアピールポイントとなっているようで、求愛の時にメスに対面して、首を右に左にゆっくり振りながら過眼線をアピールするよう



モズ ♂

な所作を繰り返します。このときもメスに逃げられてしまいましたが、オスにとって伴侶を得ることは大変な努力がいるようです。

カワセミは求愛給餌をします。

オスが獲った小魚をメスにプレゼントしますが、メスが受け取って食べるためたくカップル誕生です。人間も彼女を食事に誘ったりしますが同じようなことをしているなど微笑ましくなります。

野鳥の一生懸命な求愛ダンスや微笑ましい求愛給餌を見ていると、独身時代の私はボランティア活動にのめり込んでいて女房とろくにデートもしていなかったので反省させられます。



モズ ♀

5 巣作り・抱卵・雛育て

めでたくカップルになるとツルやタカなど大型の鳥は一生連れ添いますが、スズメなど小型の野鳥は毎年相手を変えます。オシドリも毎年相手を変えます。夫婦仲の睦まじいことのたとえで「鴛鴦の仲」と言いますが、オシドリの生態を知った時、「鴛鴦の仲」は使うべきでないと思いました。しかし、最近の離婚率の増加をみると失礼でもないようです。



オシドリ ♀ (左)・♂ (右)

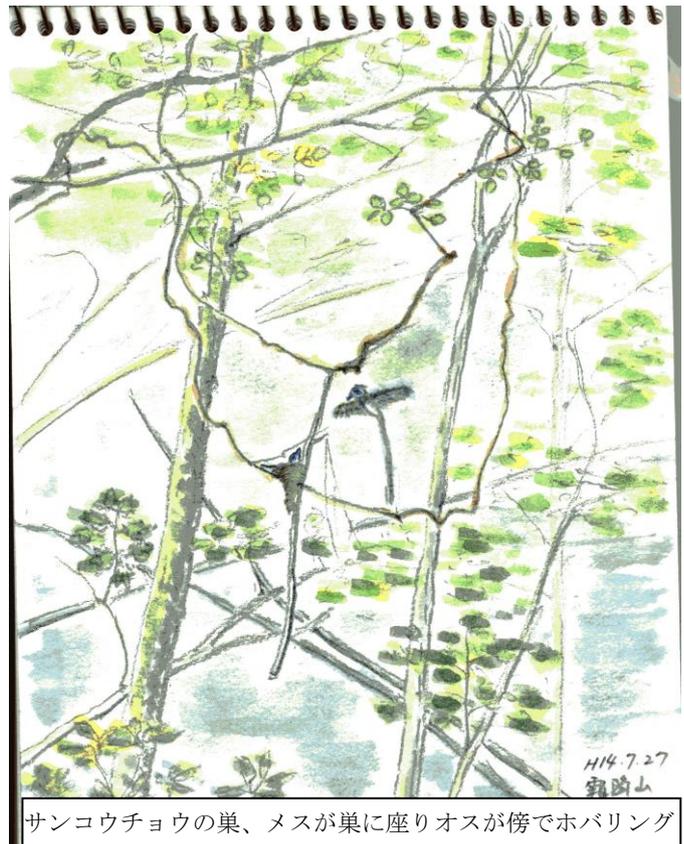
野鳥は繁殖の時期だけ(産卵から抱卵、雛の巣立ちまでの期間)巣を作り使用します。鳥の巣は種によって様々です。巣の場所や形も、木の室を使った巣(シジュウカラ・ヤマガラなど)、木の枝に巣材をお椀の様に作った巣(メジロ・サンコウチョウなど)、法面にミズゴケを盛って作った巣(オオルリなど)など種によって様々ですが、親鳥から教えてもらったわけでもないのに嘴だけで精巧に作って

いるのに感心します。

よくご存知のツバメは4個前後の卵を産み抱卵を始めますが、野鳥は種によって卵の数の多少があります。ツルやタカなどの大型の野鳥は2個ぐらい、ツバメ大の野鳥は数個、オシドリなどのカモ類は10数個抱卵します。外敵に捕食されやすい種ほど卵の数が多く、反面、寿命が長い種は卵が少ない傾向があります。

霜降山で繁殖するオオルリやサンコウチョウは3個～5個の卵を産み抱卵に入ります。2週間弱で雛が孵ります。この間、メスが抱卵し、オスは近くで囀り警戒します。サンコウチョウはオスも時々抱卵しますが、メスが懐深く卵を抱き、身がかがめているように見えるのに比べ、オスは卵の上に正座しているように頭を高くしている様子がユーモラスに見えます。抱卵中は外敵に見つからないようにメスは姿勢を低くし、オスは抱卵中も見張っているのかもしれませんが、オスの抱卵は種によって異なるようで、オオルリのオスは抱卵する姿を見かけたことがありません。

雛の巣立ちは小型種で孵化後2週間程度ですが大きい種になるほど長くなりますが、オオルリやサンコウチョウの雛は11日位で巣立ちします。この間、親鳥は雛の保温をしたり、虫や昆虫などの餌をセッセと運びます。ツバメは巣の下に糞を落とし迷惑がられますが、多くの種は雛の糞をくわえて巣から離れた場所まで運び捨てます。巣が発見されにくいようにするためと言われています。



サンコウチョウの巣、メスが巣に座りオスが傍でホバリング

6 巣立ち

オオルリやサンコウチョウは孵化して11～12日位で巣立ちします。サンコウチョウの雛は目が開くと1～2日後には巣立ちます。観察しているとようやく産毛に少し毛が生えた程度でとてもまだ飛べるようには見えず、今日明日には巣立ちしないだろうと思っても、翌日見に行くと巣が空になっていることがあります。巣立ち時、元気の良い雛は巣から飛んで近くの枝にとまりますが、成長の遅い雛は数時間遅れてようやく飛立ったりします。巣立ちを偶然目撃した鳥仲間の話によると、最後の雛が飛べずに巣から落ちるように沢近くの地面に落ち、それを親鳥が雛の近くで鳴きながら法面の上まで案内し無事木陰に入り込んだときは、体中が熱くなり涙が出たそうです。

巣立ち後1週間ぐらい幼鳥は親鳥と行動を共にしています。林の中を歩いていると好奇心旺盛な幼鳥が数mの近くまで寄ってきます。愛くるしい姿をみせてくれますが、後ろの方で姿を見せない親鳥が警戒の声をだして幼鳥を見守っています。その後は親離れの試練を迎えるのですが、その場面はなかなか遭遇することがありません。

親離れが済むと、親鳥たちは子育てでボロボロになった羽が順次生え代わります。飛ぶことが少なく

なり、囀りもしなくなつて森は静かになります。そして9月ごろ、今年生まれの若鳥も含め、夏鳥たちは南方へ渡って行きます。

親の子に対する愛情は人間を含め全ての動物で同じでしょうが、野鳥のオス・メス協力しての子育てを見ているとその甲斐甲斐しさには感動させられます。

それに比べ、自分は広島に最初に赴任した当時は新たに始めた手話奉仕活動で出歩き、3人の幼子を風呂に入れるのも女房に任せていた（放任？）のですが、野鳥の子育てを見ていると自分の子育てが恥ずかしくなります。心の中では妻や子に「すまなかったな」と思うのでありますが、この歳になつてもなかなか自己本位は変わりません。

7 雛を拾わないで

ツバメの雛が巣から下に落ちて地面にうずくまっていることがあります。その時は雛を巣に戻しておけばいいのですが、時にツバメ以外の雛が道路や地面にうずくまっているのをを見つける時があります。このときは雛を拾わないでください。迷い雛ではありません。近くの木陰で親鳥が見守っています。人がいるから雛のところに行けないのです。その場から早く去ることです。

ただ、車の往来があるところでしたら、近くの草むらにソーと移しておけば親鳥は声を出して雛を呼びます。また雛が傷ついている場合は保護となりますが個人では飼育禁止となっています。保護できる施設へ連絡して持参することになりますが、宇部市では常盤遊園協会が対応できますが繁殖期の幼鳥は保護が難しいようです。

8 野鳥観察マナー

野鳥は他の動物に比べ、比較的身近な場所で見ることができます。特に繁殖期の野鳥は姿や鳴き声が目立ち、また子育て給餌のために狭い範囲を煩雑に飛ぶために人目につきやすくなっています。その分、野鳥の繁殖の様子を観察するには好都合ですが、野鳥にとって繁殖期は最大のリスクの一つでもあります。タカやカラスなどの外敵に雛が襲われやすい時期です。親鳥は非常に警戒していますので、人が近づいたりするのも警戒します。

最近困った現象が増えて来ています。

1 眼レフタイプのデジカメが求めやすい価格になった10年前位から、写真を撮るバードウォッチャーが多くなり野鳥にとって迷惑な時代になってきました。以前は野鳥の写真撮るマニアは野鳥観察が高じて、100万円を超す望遠レンズや撮影した銀板の焼き付け代もいとわな一部のマニアでしたが、その分、野鳥の習性をよく心得て野鳥に負担にならないような撮影を心がけるタイプが多かったようです。

ところがデジカメになってから、野鳥の習性も知らずに野鳥撮影を始める

図2

フィールドマナー(日本野鳥の会)

…自然に親しむ際の心がまえとして、野鳥や自然に迷惑をかけないように…

や … 野外活動、無理なく楽しく

さ … 採集は控えて、自然はそのままに

し … 静かに、そーっと

い … 一本道、道からはずれないで

き … 気をつけよう、写真、給餌、人への迷惑

も … 持って帰ろう、思い出とゴミ

ち … 近づかないで、野鳥の巣

カメラマニアが多くなり、近距離で野鳥を撮影しようとして野鳥を追いかけまわしたり、少しでも良い写真を撮ろうと長時間にわたって撮影したりと野鳥に恐怖を与えるようになってきました。

また、車に乗っていると野鳥はあまり警戒せず、野鳥の近くまで寄れやすいので、はては、撮影のために狭い農道に車を乗り入れて路肩を崩したり、車を何台も止めて通行の邪魔をしたりと、住民から苦情が出るようになってきました。

観察時には観察のマナーを心がける必要があります。日本野鳥の会が野鳥観察などの野外活動の際のマナーについて「やさしいきもち」(図2)を頭文字にして分かりやすく書いてあります。

マナーに「近づかないで」とありますが、いかほどの距離であればよいのでしょうか。人は他人とどの程度の距離を置いて立つかという実験では、知らない他人であればその距離は長く、親しい間柄であればより近くなります。相手が異性だとより意識して距離が変わって来るそうです。

野鳥も人間とはある距離を保ちます。野鳥に歩いて近づいていくと警戒し始め、頭を上げてこちらを注視していますが、さらに近づいていくと飛び去ってしまいます。その距離は私の経験では約20mです。大型の野鳥になるほどその距離は長くなります。

反対に、野鳥から人に近づく場合は数m位まで近づいて来ます。時には1m位まで近寄って来て私の顔をしばらく見て飛び去ります。野鳥も人間同様に好奇心を持っているようです。野鳥を観察する時はこの習性を利用し、野鳥と遭遇した時にはその場でジーとしていると数分後に野鳥の方から来ることがあります。その時はじっくりと野鳥を観察できます。(これが野鳥観察の極意です。)

9 野鳥観察の好機、野鳥観察へのいざない

野鳥の楽しみ方は野鳥の姿や囀りなどを見たり聞いたりすることから始まりますが、特に繁殖期の3月～6月は求愛から抱卵・子育ての時期となり、子育ての健気さに感動させられるとともに種の保存について考えさせられるときでもあります。この時期は林や野原も花が咲き始め、新緑が芽吹き自然の息吹を感じる時でもあり、野鳥観察が最も爽やかな時です。

ただ、この原稿が掲載される6月は新緑が茂り地表の草も伸び、野鳥がその陰に隠れて見にくくなります。声はすれども姿が見えずで、声を聴いても野鳥が識別できない初心者にとっては面白くありません。ときに幼鳥が親鳥の制止も聞かず近くに現れますが、種によってはまだ親鳥のように羽の色や模様がはっきりしていないので姿を見ても識別ができてにくい幼鳥もいます。しかし、名前が分かると幼鳥の姿や仕草が大変可愛く見え、また、頑張っって大きくなれよと声をかけたくなります。

野鳥の名前を覚えるには探鳥会に参加するのが一番の早道です。リーダーが野鳥の名前や識別のポイントなどを分かりやすく説明してくれます。

探鳥会の案内など野鳥関係の問い合わせは下記の箇所で紹介してくれます。

日本野鳥の会

<http://www.wbsj.org/>

山口県立きらら浜自然観察公園

<http://www6.ocn.ne.jp/~kirara-h/>

今回は9月に「秋の野鳥」としてタカの仲間である「ハチクマ」の渡りなどロマンあふれる野鳥の様子を紹介します。(写真：塩見和彦氏)